

## 自然農法創始者の言葉

# 「無肥料栽培」

岡田 茂吉（1882—1955）  
幼少期からの数多くの病気体験を通して薬が人体に及ぼす害に気付くとともに、浄霊法・自然農法・芸術によって人類救済と病貧争のない世界の実現を目指し、様々な活動を展開した。

私はいま無肥料栽培につき解説するに当たってまず根本理論から説いてみるが、そもそも土とは何ぞやということである。いうまでもなく人間生命を保持すべき最重要なる五穀野菜を生育すべく、造物主が造られたものに違いない。したがって土そのものの本質は神秘幽玄なるものであつて、現在までの唯物科学によるもとうてい窺知し得ないことは論をまたないところである。しかるに今日までの農業は不知不識邪道に墮ちたる結果土の力を蔑視し、一切の作物をより良く生育するには糞尿または化学肥料等の人為的肥料によらねばならぬと思ひ、今日に至つたのである。

しかるに以上のごとき結果は、土壌の本質は漸次退化変質し、土壌本来の生育力は衰耗するにかかわらず、それに気がつかないため、農作不良の原因は肥料不足によると錯覚し、ますます肥料を施すから土壌の力はいよいよ退化し、今日のごとく日本の国土は瘦地化し、農耕者の口を揃えて嘆ずるところである。私は人為的肥料がいかに恐るべきかを列記してみよう。

(一) 現在最も悩んでいることは害虫の発生であろう。しかるに害虫発生の原因を究めずして、害虫駆除のみに専念している。というのはその原因を発見し得ないがため、止むを得ず次善の方法としてそうするのであるが、実は害虫なるものは肥料から発生するのであつて、近來害虫の種類が増えたというのもまったく肥料の種類が増えたからである。また殺虫剤を使用して害虫を駆除し得ても、薬剤が土に滲透して土壌を悪質化し、それが害虫発生の原因になることは未だ知らないのである。

(二) 肥料を吸収すると作物は非常に弱るのである。それは風水害に遭えば折れやすくなり、また花落ちがするから結実が少なく、背が伸びすぎ葉が大きくなるため、実が葉陰になつて米麦豆類は皮が厚く、実が痩せるのである。

(三) 硫酸や糞尿中のアンモニヤ、その他の化学肥料のそのほとんどが毒劇薬であるからそれを作物が吸収する以上、たとえ微少であつても常に住胃を通じて人体内に入る以上、健康に害なしとは言われない。とくに日本人の八十パーセント以上は寄生虫特に蛔虫を保有している事実であるが、原因は勿論糞尿中の蛔虫卵が人体内に入り成長するのであるが、糞尿肥料を二三年中止すれば蛔虫病は全滅するということを、最近の医学は報告している。この点においても無肥料栽培は偉大な成果がある。

(四) 近來、肥料の価格はますます騰貴し、肥料代を払えば供出米の売上高といつぱいいつぱいといふことは農家の許らざる計算で、それがため止むを得ず闇売りをしないわけにはゆかないということである。

(五) 肥料購入、肥料施行、消毒薬の散布等に要する手数と労力は非常なものである。

(六) 無肥料栽培の作物はさくぶる美味なること、発育がよく有肥料のものより巨大で、数量も多いのである。

以上によつてみても肥毒の恐るべきかを知るとともに、無肥料栽培のいかに有利であるかは充分認識し得たであらう。これを総計算するとすれば、農業経済はこれまでの二倍の利益を挙げ得ることは難事ではないのである。実に日本における農耕の一大革命であるといつても過言ではあるまい。以下私の経験によつて得たる成果や方法および幾多實際家の報告を発表してみよう。



を發揮するから実に美味である。私は無肥料野菜の味を知っているから、人生の幸福感をいかに増したことであろう。しかも無肥料栽培においては肥料費と施肥の節約悪臭の不快からも免れ、あらゆる寄生虫伝播の危険も除かれ、害虫の発生は極めて少なく、味もよく量も殖えるのであるから一石七鳥の効果があるわけである。私はかような大問題を一刻も黙視してはおられない。速やかに天下に発表してこの福音を頒ち与えんと思ふものである。

まず、實際論から述べてみるが、そもそも土の性能はいかなるものであるかということに、土壌は土素、水素、火素の三大元素の密合体による三位一体の力の構成である。勿論植物育成の基本的力は土素であつて、水素、火素は客動的力である。故に主動力である土壌そのものの素質いかによつて植物に良、不良の結果を来すのであるから、栽培の場合その根本である土の素質をより良質にすることが主要条件でなければならぬ。良

質の土素ほど好結果を得らるるからである。しからは良土たらしむる方法はいかんといい、それは土質の精力を強化することである。そうするにはまず土質を清浄、純粋化しなければならぬ。それは清浄なる土質ほど植物に対する生育力は旺盛だからである。しかるに今日までの農業のいかに誤つていたかは右と反対に土質を極力汚穢に満たすのを可とした。このことの説明に当たつてはまず反対論から説く方が判りやすいと思う。

反対論とはいかなる訳かというに、昔から農作に肥料は切つても切れない重要事としていて、実は施肥すればするほど土を殺してしまうのである。肥料を施せば一時は良成績を挙げ得ても漸次土は肥料中毒に罹り、肥料を施さなければ良結果を得られないことになる。したがつて肥料を施せば施すほど逆効果を招来するわけである。なにより農民諸君が水田の稲作収穫が不良になると客土をする。客土をすれば一時的収穫が増す

からである。この場合彼らは誤つて判断を下す。それは年々栽培することによつて土の養分を吸収してしまふから、土の栄養が貧困になつたからだと解釈する。実は年々肥料のため土質が弱つたことに気がつかないのである。ところが肥料分のない新しい土は土の生活力が旺盛であるから、良成績を挙げ得るといふわけである。理論はこのくらいにしてともかく実際上いかに無肥料が有利であるかを順次説明してみよう。

まず第一に挙ぐべきは無肥料栽培の特徴として作物の背丈の低いことである。有肥料においては丈が高くなること、葉伸びが旺盛で葉が大きく繁るからさきに述べたごとく豆類等の実は葉陰になつて成育悪く、また花落ちが多いので結実も非常に少なく、特に枝豆等は無肥料においては二倍の収穫を挙げ得られ、一粒といえども虫食いなく、その美味たるや何人も讃嘆するのである。勿論、豌豆、空豆等のごときも皮の軟らかきこと無類である。

そうして無肥料栽培においては決して失敗のないことである。よく素人が馬鈴薯などを作る場合、芋が小さくかつ少ないとか、全然無収穫などの嘆声を聞くが、それは肥料の多過ぎるためであることに気づかない結果、反対に成績不良なのは肥料の少なきためと誤解し、ますます肥料を用いるからますます成績が悪くなる。しかもこの際指導者または経験者に質ねる場合「その原因は種子の不良や不適期に播くから」とか「土壌の酸性によるため」などと言ひ、

まったく的外れで真の原因に気づく由もないのである。ところが無肥料による馬鈴薯は極めて白色で、香気が高く、ネットリと舌触りよく、品種が違ふかと思ふほどの美味である。勿論八ツ頭、里芋等もそうであるが、特に薩摩芋は高畝にし、畝の間隔を広くし、日当たりを充分よくすればその容積の巨大なると美味なることは驚くのほかないのである。最も農家においても薩摩芋はあまり施肥をしないようである。

次に私は玉蜀黍について述べてみるが、無肥料における玉蜀黍の良成績は特筆する要がある。ただし玉蜀黍はもとよりすべての種子も最初は肥毒を含んでいるから、一、二年は成績が思うようでないが、三年目くらいから目立つて良くなるのである。土に肥毒なく種子にも肥毒のない玉蜀黍は茎は非常に太く、水の垂るるような葉の青さで、日当たり良く水切れのない土地であれば結実がよく、実の棒は長く、粒は隙間のないほど密集し、列が正確で口に入れるや柔らかく甘く、一度口に入れるや忘れ得なくなるのである。大根なども純白色で肌理細かく、ねつとりして甘味があり実は美味で太いのである。よく大根にスがあり、またはガリガリするのは肥毒のためである。また無肥料の菜類は香気馥郁として食欲を唆り、色よく軟らかく虫食いなどは絶対ない。勿論糞尿を用いなければ衛生的である。

無肥料栽培において特に推奨したきは茄子である。それは皮の柔らかい事、色の好い

事、香気満点で食欲をそそる事夥しく、私の家の家族などは有肥の茄子は食わないくらいである。また稲作の場合、藁を細かく刻み、水田の土によく混ぜるので藁は熱を吸収するから土が温まるわけである。そうしてこれはよく知られていることであるが、冷たい山水は非常に悪いからできるだけ溝を浅く長く作り、流水を温めることである。その場合中間に池を作ることは不可で、池は底が深いため水の温まりが悪いからである。

瓜類や西瓜、南瓜等々何人も経験のないほどの優良なるものができるのである。

小麦であるが、麦も米も背丈短く量も質も優良なることは勿論で、特に米においては光沢があり、コクのあること糯米のごとくで、重量あり美味満点で品質はいつも特等米と言われるのである。

以上のごとく、私は簡単ながら無肥料栽培の有利なる点を述べたつもりである。とくに今日到る所に見る家庭菜園に対し、かくのごとき福音はないであろう。ともかく素人

が糞尿を扱うことは堪えられないほど苦痛であるばかりか、それがかえって不良の原因となったり蛔虫の虫という有り難くもないお客様を腹の中へ招来するというにおいてをやである。知らぬこととは言いながら今日までは骨折つて不成績を続けて来たわけである。私など大抵の野菜は種子の播き放しで、たまたまときどき除草するくらいの手数で上等の野菜ができるのであるから、何と有り難いではないかと言いたいのである。

そうして前述のごとく金肥および人肥は必要としないが、天然堆肥は大いに利用する必要があるのである。それについて述べてみよう。あらゆる植物を成育さす場合最も肝腎なことは、根の末端である。毛細根の伸びを良くすることであつて、それには土を固めな

いようにすることである。堆肥はあまり腐らせすぎると固まりやすくなるから半腐れくらいがいい。草葉の堆肥は早く腐触するからよいが、木の葉は繊維や筋が硬いから長期に涉つて充分腐触させるべき

である。その訳は前述のごとく根の尖端が堆肥の葉筋に当たり妨害されるからである。近來根に空気を与えるのを良いとしているが、これはちよつと的外れである。何となれば空気が流通するくらいの土であれば根伸びが良いからで、実は空気が関係ないのである。

いま一つ注意すべきは土壤を温めることで、普通の野菜においては堆肥は地下の一尺くらい深さに一尺くらいの積層すなわち床を作るとよい。ただ大根、人参、牛蒡のごとき、根が目的のものは、堆肥の深さもそれに準ずべきで、その場合草葉の堆肥を土とよく混ぜ合す事、木の葉の堆肥は右のごとく地上の床作りにする事、これが理想的である。

近來、土壤の酸性を不可とするが酸性の原因は肥料のためであるから、無肥料なればその憂いはないのである。

いま一つ世人の意外とすることがある。それは農業においては連作を不可としているが、私は連作主義で好成绩を

挙げていた。しかも年を経るに従い成績は漸次良くなることである。これは奇蹟のようであるが、実は立派な理由がある。それは私の曰う土を生かし、土の力を強盛にするためには連作するほどその野菜に対し土はその野菜を育むべき適応性が自然に醸成さるるからである。

次に害虫も無肥料であればほとんど皆無でないまでも、現在よりも何分の一に減るであろう。農民諸君も肥料が多すぎると害虫が湧くということをよくいわれている。かの葉巻煙草には最優秀なる原料としてマニラ、ハバナ産を用いるが、その葉は虫食い葉がなく、すこぶる香気が高いが、まったく無肥料のためであることを以前専門家から聞いたことがある。またなによりも雑草に虫食いがないうことで、春の野の摘み草の中にある嫁菜、芹等が特に香気の高いのは無肥料のためであろう。

ここに注意すべきことがある。いままで有肥料の畑に対し無肥料栽培を行う場合、最初の一、二年は成績が悪い

が、それはその土が肥料中毒に罹っているためで、ちよつと人間の場合酒飲みが禁酒をすれば一時はボンヤリしたり、煙草飲みが禁煙をすると活気がなくなり、モヒヤコカイン中毒者がやめれば我慢ができないと同様の理である。まず二、三年は辛抱してその後を待つべきであつて土および種子の肥毒が消滅するに従つて土は偉力を發揮するのである。

以上は、無肥料栽培の理論を説いたものであるが、これによつていかに従来の農耕法が誤っていたかが判るはずである。勿論、信仰との関連はなく、全然やめ堆肥だけによつて画期的成果を挙げ得るのである。しかるにそれに加えて神霊による土の浄化を行うことによつて、一層の効果を挙げ得るのであることを充分承知すべきである。

以上幾多の実験報告が証明するであろう。

〔自観叢書〕二篇

昭和二十四年七月一日

岡田茂吉全集

著述篇 第6巻より